

ドクターインタビュー

本号からドクターシリーズを掲載いたします。通りいっぺんの治療法ではなく、かといって異端と云われるものでもなく、多くの先生方は日頃、患者さんに接して千差万別の症例を見ながら、ベストであろう治療をされています。その辺のところは皆さん方もぜひ知りたい、知っておきたい…と云うことで先生方にご多忙のところを、お願いし連載いたします。

ふくすみアレルギー科院長 吹角 隆之(ふくすみ たかゆき)先生

生活全般をチェックしながら、アトピーを学んでもらうのです…と、吹角隆之先生。吹角先生は平成2年から13年間大阪府立羽曳野病院に勤められ、平成15年9月に大阪市中央区で「ふくすみアレルギー科」を開院されました。

—「ふくすみアレルギー科」を開院されたきっかけがあったと聞いておりますが？

ひとつに化学物質過敏症のために病院に来られない患者さんがいます、シックホスピタルですね、消臭臭やワックスにとっても敏感な人や喘息の人、アレルギーのひどい人は、病院内の空気環境で症状が出てしまうんですね。私の居た病院も待合を改装したり新築とかもあって、対応はしましたが、待合室でも診察室でもしんどいって言うんですね患者さんが。だからそういう人たちを診ていくにはちょっと私立病院でも難しいなと感じていたので、漆喰や金属や木でつくったようなクリニックにして、患者さんができるだけ安全な環境でやるのがいいのではないかと。

なので当院の内装は、化学物質過敏症、アレルギー疾患の患者さんを考慮して、天然ムク材、漆喰、金属等を用いて化学物質の放散を可能な限りおさえています。

—先生の治療法を具体的ににお聞かせください。

まず患者さんの訴えをよく聞き、生活環境・食生活・職場環境などから原因をつきとめて患者さんとともに考えていきます。

たとえばアトピー性皮膚炎の患者さんの体質を大きな風呂おけにたとえると、外からの刺激がいろいろな蛇口から注がれ、排水口からの排出量を上回るとあふれるわけですね。蛇口は食物、化学物質、吸入抗原、接触抗原、生活習慣、ストレス、金属、電磁波などの物理的な要因、感染症のように分類して考えます。その人の体質と周りの環境とのミスマッチがオールアトピーになるのです。アトピーだけでなく慢性的の疾患や生活習慣病も全部ふくまれます。

だから病気になったときに漏れを全部診てその原因となる蛇口を一個一個しめて自分の排出処理能力に見合う量に減らしておかないと弱いところに出てくるんですね。アトピーなら皮膚にでるし、鼻炎なら鼻、喘息なら肺、心筋梗塞なら心臓にでる。その原因や悪化要因を減らす努力をせずに薬物療法だけで直そうとすると無理が生じます。

実際はアトピー性皮膚炎といっても7割8割の人はステロイドを上手に塗ってコントロールできますよ。そこに少しでもこの知識があればもっと楽にできますね。

だけでも、それでもどうしようもない人が残りの2割3割はいるのです。そういう人たちはステロイドを塗ると余計悪くなったり、ステロイドが悪いというわさを聞きつけてやめてしまったりするとコントロールが悪くなりこじれてしまう、そういう風になったときは困ってしまうんです。

—あえて先生はその2割3割の方の治療をされておられるのですか。

なぜかという薬が使えない方の多くは化学物質過敏症というアトピーとは別の病気を併発している場合がある。シックハウスからはじまって、においがだめ、薬物がだめ…となると、そういう患者さんはなかなか医師に対応してもらえず、病院を転々とする事になる。薬がのめない、塗れないとなると、ほとんどの場合は精神科へまわされてしまう。

—なぜ、そうになってしまうのですか？

なぜかという、一般的には現代医学は検査して診断して薬を処方する、このベルトコンベアーに乗らない人は診られない。薬がつかえないとかは難しいん



【プロフィール】
 ふくすみアレルギー科院長
 吹角 隆之(ふくすみ たかゆき) 医師
 昭和33年生まれ
 信州大学医学部卒業・大阪大学大学院博士課程修了 大阪大学皮膚科入局
 平成2年～14年 大阪府立羽曳野病院(現大阪府立呼吸器・アレルギー治療センター)にてアトピー性皮膚炎を中心としたアレルギー性疾患、食物アレルギー、シックハウス症候群、化学物質過敏症に取り組む。
 平成15年 大阪天満橋にて開院
 日本皮膚科学会皮膚科専門医日本アレルギー学会 認定専門医

ですよ。当医院では薬を使わない患者さんが何人もいますよ。環境の改善、生活習慣や食事指導だけで治す。「あなたちゃんと寝なアカンよ」とか「部屋掃除せなアカンよ」とか「たみで寝てたらアカンから洋間で寝なさい」とかね。患者さんには食べ物の日記も書いてもらおうし、どんな部屋でどういふ布団でどんな枕で寝てるのとか、睡眠時間も全部チェックします。

だから来るたびに、「今日は食べ物の話をしましょう」「今日は化学物質の話をしましょう」という風にひとつひとつ要因を絞っていくんですね。食べ物なら、なにを食べているのか問診への回答を書いてもらって、2度目の診察で同じものを続けて食べてないか、好きなもの、よく食べるものはなにかをチェックします。そうしながらどうやって治していくかを見計らっていきます。そして、ひとつ蛇口を絞めても治らなければ次の蛇口を閉めにかかります。

要は今の生活をチェックしてもらって学んでもらうんですよ。治すんじゃないって学んでもらって、本人が自覚して自分で軌道修正して自立して行ってもらう。そのアドバイザーです。この人はこれ以上掃除しても無駄やな…と思ったら食べ物、それもだめなら衣類というふうには、いかに治る方向にむけるか、ある意味で私はスイッチを押すだけです。自立というスイッチをどうやって押しあげたらこの人は自分の力で治すように生活してゆくことができるのか、それを考えます。

—アトピーの標準治療についてはどのようにお考えですか？

ステロイド薬は自分の副腎ではつくり切れない部分をおぎなうもので、まずステロイド薬で治すということが間違いなのかなってときとき考え込みますね。でも患者さんが自分の体質以上の「贅沢をしている」なら、その人の生活を考えないで、治るか治らないか、ステロイドを塗るか塗らないかを議論するのは意味がないんです。暮らし方と体質が合っていない。そこのギャップを診ないでは判断できない。たとえばハウスダストが原因なら一生懸命掃除してそれでも乗り切れない部分も弱いステロイドで上手にだまらだまらでも一生乗り切ったらいいんです。それでも乗り切れない人もいるから困るんですけど。でも上手にいけば、7割8割の人は乗り切れるのにそれをステロイドなんて絶対めつたらいけないとかいう片意地な医者もいるんですね。

現代社会ではステロイドを使わざるを得ない人もいますからね。極端な治療はいけません。アトピーの治療は車のバックと同じです。バックなのにアクセルをふかしたらだめですよ、ハンドルを右へ切ったら左へいくし、またその反対も、焦ったらこんがらがって判らなくなる。だから急激な治療変更をしてはいけないのです。目標は遠く、ゆっくりハンドルを切ってアクセルは急にふまない。また生活習慣を省みず強いステロイドを漫然と塗り続けているのはアクセルとブレーキ両方踏んでいるのと同じエンジンが焼けてしまっただ変ですからね。

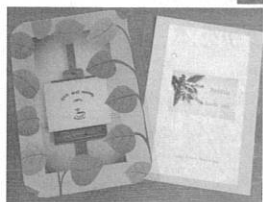
アトピーの治療は長い展望のもとゆっくりやる。それだけで良くなっていくと私は考えています。

—ありがとうございました。

文責・三原ナミ(オフィスメイ)

横浜・野村先生の皮膚科医院に併設 Gallery & Café Green breeze

長年ご支援を頂戴しております野村皮膚科医院の野村有子先生より昨年11月にオープニングパーティーのご招待を頂戴し、お伺いして参りました。横浜市東急東横線反町駅から徒歩10分、お洒落な外観のビルが見え、待合室に入ってもその見晴らしの良さやゆったりとしたスペースに患者さんもきっとリフレッシュされるだろうと思う居心地の良さ。今回は、その4階に患者さん方が診察待ちの間もそうですが、診察が無くても自由に利用でき、患者さん同士の交流の場となればという先生のお気持ちが形となったギャラリー&カフェをオープンされました。もちろんのこと、アレルギー特定原材料25品目を一切使用していないメニューが並びます。クッキーやアイスクリーム、ゼリー、コーンフレークまで無添加25品目無使用となっています。治療もそうですが、患者さんの日常生活の指導や心のケアまでフォローされる先生のお考えとその実行力には感服いたしました。協会としま



◀ケーキショップのようなお洒落なメニュー

◀サンルームの雰囲気の中でおくるぎタイム

しても、少しでも患者の皆さんに必要と思ってもらえるように、出来ることを1つずつ進めていかなければ…と気持ちを引きしめ帰路につきました。お近くの方はもとより、横浜へ行かれた時には、ぜひ皆さんお立ち寄りになってみては如何ですか。

〒221-0825 横浜市神奈川区反町4-27-14 チャリオタワー TEL 045-328-1377